

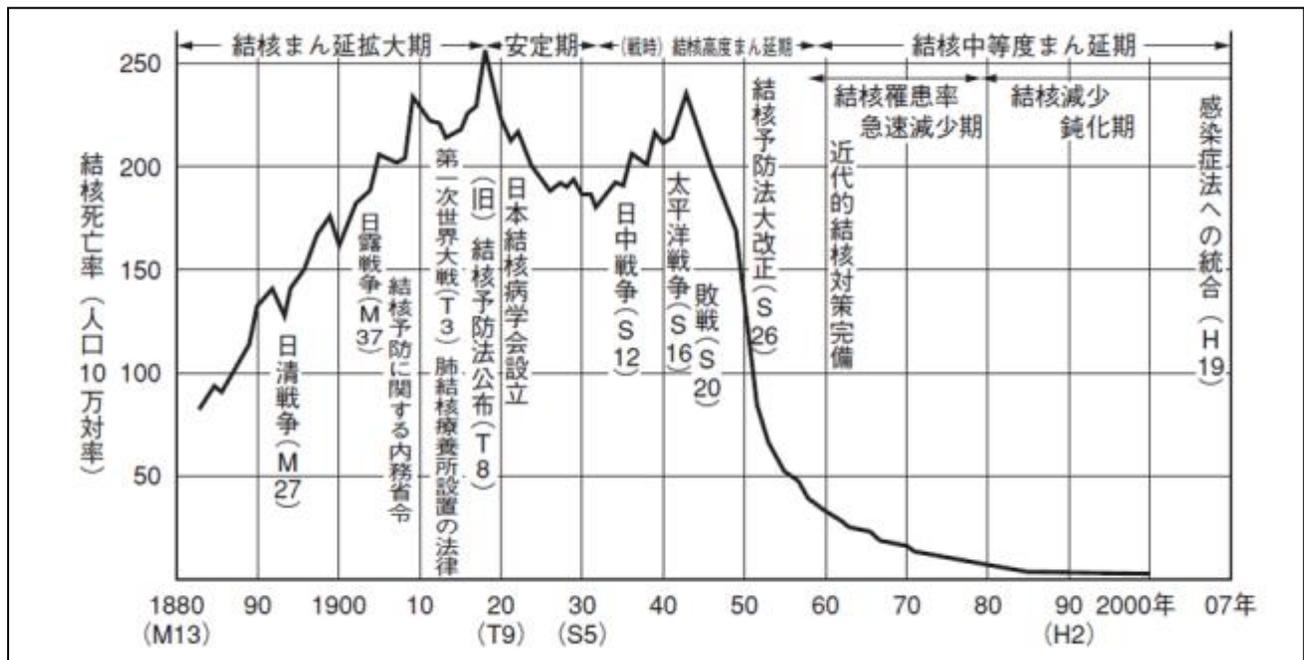
# 結核・学校の対応

海津市医師会 寺倉俊勝

## 1. 結核について

結核症は主として結核菌の感染に起因して起きる疾病である。結核症そのものは19世紀の半ばから知られており、結核菌は1882年にコッホにて発見されている。わが国では明治から大正にかけて広がり、太平洋戦争時には統計はないがおそらく最も広くまん延していたと思われる。

【図表1 わが国の結核の死亡率の推移】



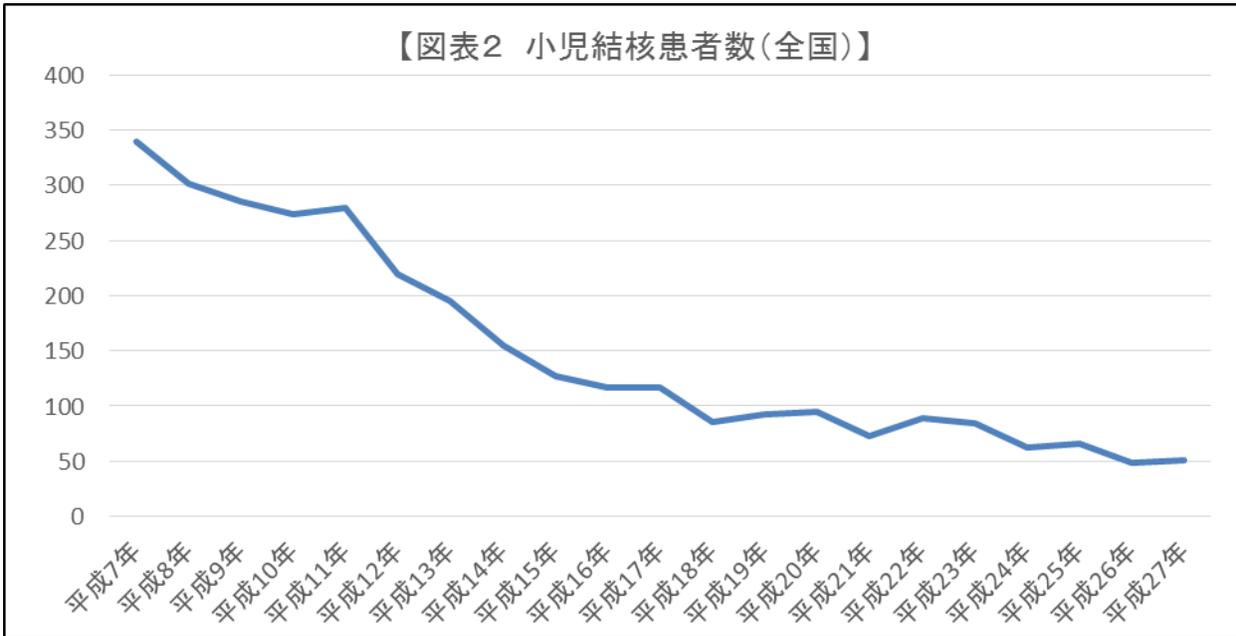
1955年に結核の治療薬としてストレプトマイシン(SM)、イソニアジド(INH)、パラアミノサリチル酸(PAS)の3剤併用が使用できるようになり、その頃日本では、以下のような結核症の管理体制が確立され、以後、罹患率は顕著に下がっていった。

- |               |              |
|---------------|--------------|
| ①BCG接種による発病予防 | ②集団検診による早期発見 |
| ③化学療法の進歩      | ④結核登録制度      |

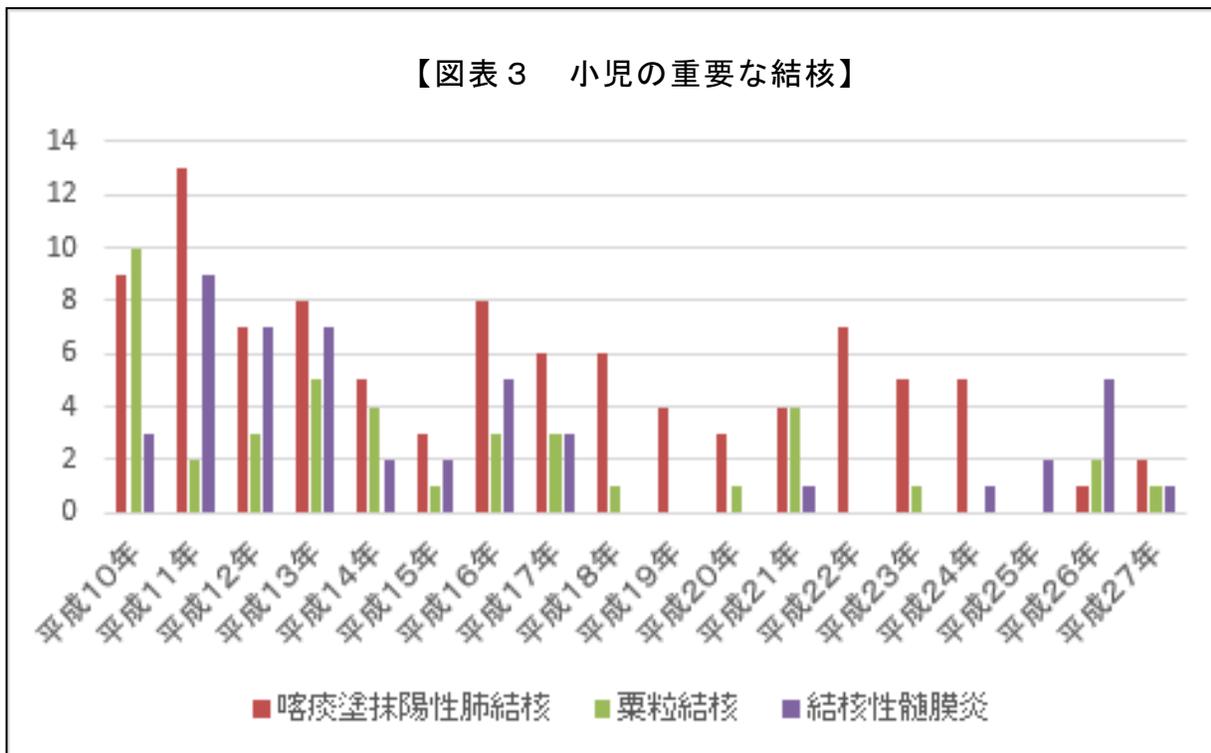
しかし、現在においても世界の感染症の中では結核症はHIV感染症に次いで死者が多く、また、日本の結核罹患率は先進国の中ではロシアに次いで高い。そしてHIVによる死亡の35%は結核によるものとなっており、特に低、中所得に属する国ではHIV感染が結核症の主な原因となっており、多剤耐性菌の問題も含めて結核は非常に重要な感染症となっている。

## 2. 小児の結核症について

わが国では、結核は太平洋戦争時の流行期に感染した高齢者の感染症として非常に重要となっているが、図表2からも分かるように、小児の結核症は減少してきている。

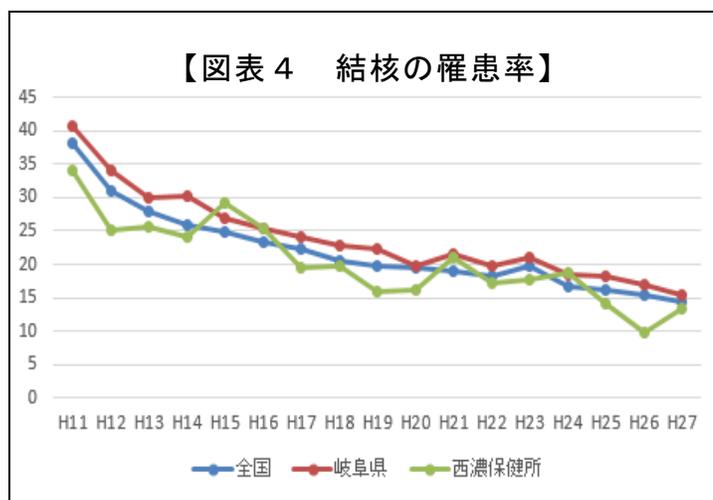


しかし、図表3のように喀痰塗抹陽性肺結核、粟粒結核、結核性髄膜炎など重要な結核症は小児では割合として発症があまり減少していない。そのためもあり、結核症は現在でも小中学校において十分に管理されなければいけないと考えられる。

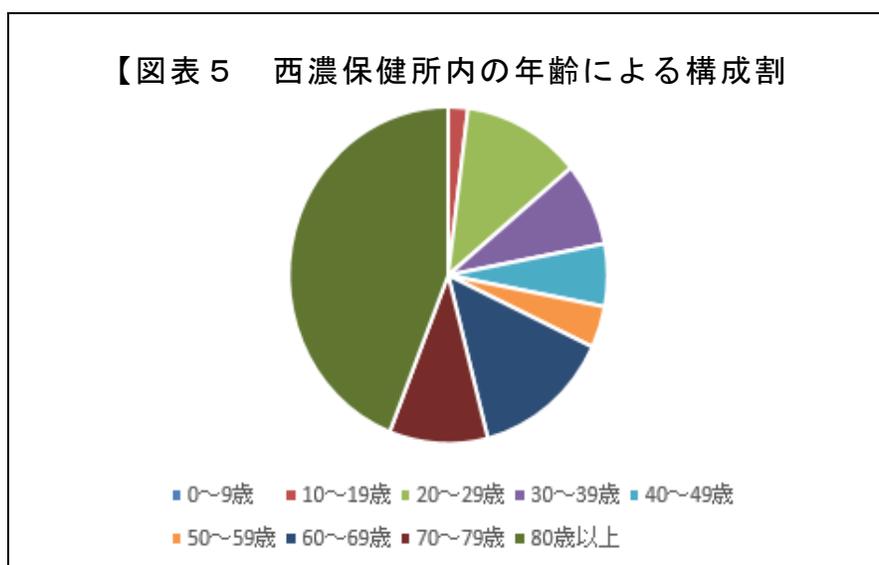


### 3. 岐阜県及び西濃圏域の結核について

成人の結核罹患率は減少を続けている。日本全国、岐阜県、西濃圏域としても図表4のように順調に低下を続けている。また小児の結核患者数も現在では図表2のように減少し西濃圏域としてはほとんど0人を続けている。小児の結核患者数は、日本全国では平成27年は51人であり、岐阜県では患者数は1人であった。実際に結核患者の年齢構成を確認してみると西濃保健所管内では、図表5のように高齢者の割合が高く小児の割合は非常に低かった。



海津市の結核対策委員会の統計では、平成28年度の要精密検査対象者は、結核高まん延国居住歴があり、その割合はおおよそ平成23年から平成28年度まで毎年0.2%前後で推移しているが、実際の治療の対象となる患者の数は0人であった。精密検査対象者に選択される理由としては他に自覚症状、家族歴、既往歴



等があるが、現在は結核高まん延国居住歴が大きな部分を占めているという点は、現在の日本の小児結核症の状況を示していると考えられる。

### 4. おわりに

このように統計上、現在の日本では学校における結核が過去のもののようになってきている。しかし、世界では、いまだ高まん延国が数多く存在し、また薬剤に対する耐性菌も多く出現してきている。従って、結核自体はいまだに非常に重要な感染症であり、いつ結核患者が身近に出現しても決して不思議ではない怖い伝染病である。常に警戒を怠ることなく結核に対する知識を得るように心がけ、関係機関との連絡を取るよう努めるように警告を発したいと思うものである。学校としての対応は「学校における結核対策マニュアル」に詳しく、参照を勧めたい。